

「亡き母の遺徳を称える」

藤野仁三

昨年六月十四日の岩手・宮城内陸地震が起きたのは、丁度母親の葬儀の日の朝であった。葬儀に備え、筆者は一足先に帰郷していたが、家族は東京から新幹線で当日に駆けつける予定であった。しかし、朝の地震のため東北新幹線が全てストップし、結局、葬儀に出ることはできなかった。

実家の周辺に地震の被害はなく、葬儀は昼過ぎから予定通り執り行われた。読経や弔辞の間にも余震が続き、時折寺の本堂の高い梁がきしんだ。母は享年九十歳。大往生でありこの世に未練はないはずだと思いながらも、余震の揺れがあるたびに何か供養しなければと考えた。

その結果作ったのが次の五言律詩「称亡母遺徳」（亡母の遺徳を称える）である。読み下し文と訳詩を添えた。（訳詩は長兄・薫の作品）

夭桃仁里女	夭桃は仁里の女
白李農家夫	白李は農家の夫
晨旦興秀穎	晨旦に秀穎を興し
夜中整旧襦	夜中に旧襦を整つ
薰陶将礼節	薰陶は礼節を将し
孝行勿榮枯	孝行は榮枯 勿し
後楽歌琴友	後楽は歌琴が友
洋洋長世乎	洋洋たる長世かな

仁三作・五言律詩（脚韻：夫、襦、枯、乎）

（訳詩）

夭桃の娘は良家の出
嫁ぎゆきしは 農家の夫
夜明けと共に野辺に出で
夜は半ばまで針仕事
子等を育てるは礼節で
義父母への孝に手抜きなし
年経て友は琴と歌
子等皆名を得て家興す

漢詩そのものは、中国の『詩経』の「桃夭」から着想をえた。「桃の夭夭たる 灼灼たり其の華 この子ここに歸がば其の室家に宜しからん・・・」という有名な一節がある。若い花嫁の門出の歌であるが、子孫や婚家の繁栄を願う歌でもある。古来、中国ではこの詩が結婚式での祝い歌であったという。日本の「高砂」や「四海波」などの謡いに近いが、その歴史ははるかに古い。

亡き母に花嫁賛歌もどうかとは思いますが、漢詩の内容は読み下し文からも明らかなように、故人の生涯を四十字に盛り込んだ「称徳詩」である。いわば亡母の人生賛歌。作者としてはどうしても「夭桃」で始めたかった。そして最終句では、「長世」という子孫・婚家の繁栄が長く続くことを意味するおめでたい言葉で結んだ。

漢詩の形式は、尾聯（七-八句）を除きすべてが対句仕立て。桃と李は、古来花木の代表として「桃李」と呼ばれた。これは仲睦まじい夫婦の隠喩でもある。詩文には、亡母の子供（筆者の兄姉弟）全員の名前の一字を読み込んだ。平仄、脚韻もすべて五言律詩の作法に準じた。

この律詩は、長兄が書にして四九日の法要で仏前に捧げた。書用の紙は、母の実家が四十年前に漉いた地元名産の東山和紙。記念にと残していたものを分けて頂いた。額装した詩書は実家の仏間にあり、位牌からいつも見れるように掲げてある。（写真）

